

追 悼 の 辞

本日ここに、御遺族や御来賓の皆様の御参列をたまわり、本市の戦没者、殉職者七千二百三十二柱ならびに一般戦災死没者百一柱の合同追悼式を挙げるにあたり、謹んで哀悼の誠を捧げ、心から御冥福をお祈り申し上げます。

顧みますと、昭和二十年の終戦から、七十九年目の夏を迎えました。

また、本日、八月六日は、本市が大空襲を受け、市街地の大半が焦土と化した悲惨な歴史を刻んだ日でもあります。

歳月が流れてもなお御遺族の皆様の深い悲しみは、決して消えることはなく、その心情を拝察いたしますとき、お慰めのことばもございません。

私たちが今日、享受している平和と繁栄は、明治以降の幾多の国難に際し、国内外の苛烈を極めた戦闘の中で、祖国の安泰と愛する家族を案じつつ戦場に倒れた方々、激しい空襲によって命を落とされた方々、公共の安寧のために殉職された方々の尊い犠牲の上に築かれたものであります。

また、かけがえのない肉親を亡くされた悲しみに耐えながら、多くの苦難に立ち向かい、家族を守り、今日まで歩いてこられた御遺族皆様方の努力の賜物であります。その御労苦に対し、衷心より敬意を表する次第であります。

世界を見渡しますと、自国の利益を第一とする考え方から、軍事侵攻や異なるものを排除しようとするテロの動きが常態化しています。誰もが平和な社会を望んでいるはずなのに、争いがなくならないことに強い憤りを感じざるを得ません。

昭和から平成、そして令和となった今、国民の大半が戦争の悲劇を知らずに育った世代であり、来年で戦後八十年を迎えます。そのような中、本市においては、「本市が持つ三つの宝」の一つである「人間力あふれる子どもたち」を輝かせる施策に引き続き取り組んでおり、本日は中霧島小学校の児童の皆様にも御参列いただいております。

未来永劫、悲しみの歴史を繰り返すことのないよう、過去を謙虚に振り返り、悲惨な戦争の教訓を風化させることなく、これからの世代につないでいくことは、今ここに生きている私たちに課せられた重要な使命であります。

これからも平和への不断の努力を続けてまいりますことをここにお誓い申し上げます。

結びに、戦没者、空襲犠牲者各位の御霊が、永遠に安らかでありますこと、そして、今後とも、わが郷土、都城の繁栄と平安を見守りくださることを願い、併せて御遺族をはじめ、御参列の皆様方の御健勝と、御多幸を祈念申し上げ、追悼のことばといたします。

令和六年八月六日

都城市長 池田 宜永